

古事記から学ぶ その7  
大国主神は その後どうなったか

大国主神は、80人の腹違いの兄弟との争いの末、稲羽國の八上比売(やかみひめ)を手に入れた。さらに須佐之男を訪ねて出向いた根堅洲國で、須佐之男の娘である須勢理比売(すせりひめ)とも契りを交わした。

八上比売は稲羽國から、大国主神に出雲まで連れてこられて御子を生んだのだが、須勢理比売の強い嫉妬心に耐えられず、稲羽國へ帰ってしまった。

古事記の舞台は、壮絶な男女関係の展開になってきた。

### <1> 沼河比売(ぬなかわひめ)の登場

大国主神・別名:八千矛神(やちほこのかみ)は、高志國(こしのくに:のちの越國)の●沼河比売(ぬなかわひめ)を妻にしたいと思って、高志國を訪ねた。そして、沼河比売の家の前で歌を歌った。

「八千矛神は妻なる人を求めて歩き回ったが、これぞという人にはめぐり会えなかった。高志國に素晴らしい人がいると聞き・・(以下省略)」。歌を聞いた沼河比売は、寝屋の戸を開けず、歌だけを返した。

「八千矛神はそのようにおっしゃりますが、私は水面に浮かび風に揺れる水鳥のようなもの、今は出て行かれません、いつの日かあなたの元に行くことでしょうかから、お待ちください。(途中省略)……

日が隠れて暗い闇になれば、戸を開けてあなたをお迎えしましょう」

その夜はついに会うことはなかったが、次の晩に一夜を共にした。

### <2> さてどうする大国主神

大国主神の正妻である須勢理比売は、多くのお后の中の大后だが、嫉妬心が強く、大国主神も困り果てて、妻から離れて暮らすことを決意して、出雲國を出て、大和國へと旅立つことにした。

出立の準備が整って、馬の鐙に足をかけた時に、こんな歌を歌った。

「今旅立ちにあたって衣裳を整えたところだが、どうもこの衣装は私には似合わない。……(途中省略)

私が旅立ってしまうと、お前はたぶん悲しむに違いない」。これを聞いた須勢理比売は、盃に酒を注ぎ馬に乗ろうとしている大国主に向かって、こう返した。

「八千矛の名を持つ尊いお方、大国主神よ。あなたは国々を回って治める力強いお方だ。行く先々で妻を見つけるでしょうが、私は哀れな女の身、あなたの他に頼るものではありません。どうか行かないで……(以下省略)」。これを聞いた大国主は機嫌を取り直し、盃を取り交わして、末永く心変わりしないことを誓う「うきゆい(\*註)」をした。ここで交わされた五つの歌を「神語り(かむがたり)」という。

\*註:うきゆいとは 神の前で誓いを立てて、神の意志に反していないことを確かめる儀式

天照大神と須佐之男神の間で行われた誓いの儀式「うけい(宇気比)」と同じか。

出雲國を出て大和へ出向く決意をしたはずの大国主神は、結局旅に出るのはやめて出雲國にとどまることになった。

須勢理比売が歌を通じて語ったように、大国主神は多くの妻を持ち、多くの御子をませた。

大国主がませた御子を整理して下図(次ページ:「大国主神の妻とその子たち)にまとめて見た。

大国主神の妻とその子たち

大  
国  
主  
神

- 須勢理比売 (すせりひめ)
- 八上比売 (やかみひめ)
  - 木俣神 (きまたのかみ)
- 多紀理毘売命 (たきりびめのみこと) ……胸形の奥津宮
  - 阿遲鉏高日子根神 (あぢすきたかひこねのみこと)  
<迦毛大御神 (かものおおみかみ)>
  - 高比売命 (たかひめのみこと) 別名: 下光比売命 (したてるひめのみこと)
- 神屋楯比売命 (かむやたてひめのみこと)
  - 事代主神 (ことしろぬしのかみ)
- 八島牟遲能神 (やしまむじのかみ) ——— ●鳥耳神 (とりみみのかみ)
- 鳥鳴海神 (とりなるみのかみ)
- 日名照額田毘道男伊許知邇神 (ひなてりぬかだびちをいこちになのかみ)
- 國忍富神 (くにおしとみのかみ)
  - 葦那陀迦神 (あしなだかのかみ) : 別名八河江比売 (やかわえひめ)
- 速甕之多氣佐波夜遲奴美神 (はやみかのたけさわやじぬのかみ)
  - 天之甕主神 (あめのみかぬしのかみ) ——— ●前玉比売 (さきたまひめ)
  - 甕主日子神 (みかぬしひこのかみ)
- 淤加美神 (おかみのかみ) : 竜神 ——— ●比那良志毘売 (ひならしびめ)
  - 多比理岐志麻流美神 (たひりきしまるみのかみ)
- 比比羅木之其花麻豆美神 (ひひらぎのそのはなまづみのかみ)
  - 活玉前玉比売命 (いくたまさきたまひめのかみ)
- 美呂波神 (みろなみのかみ)
- 敷山主神 (しきやまぬしのかみ) ——— ●青沼馬沼押比売 (あおぬまうまぬまおしひめ)
- 布忍富鳥鳴海神 (ぬのおしとみとりなるみのかみ)
  - 天日腹大科度美神 (あめのひばらおおしなどみのかみ)
  - 若昼女神 (わかひるめのかみ)
- 天狭霧神 (あめのさぎりのかみ) ——— ●遠津待根神 (とおつまちねのかみ)
  - 遠津山岬多良斯神 (とおつやまざきたらしのかみ)

八島牟遲能神(やしまむぢのかみ)から遠津山岬多良斯神(とおつやまぎきたらしのかみ)までを十七世神(とおまりななよのかみ)と言う。

### <3> 海からやってきた神

大国主神、別名大穴牟遲神(おおなむじのかみ)が出雲の御大の岬(みおのさき:\*註)にいた時沖の方から「ががいも」の実の殻を船にして、「みそさざい」の皮を着た小さな神が近寄ってきた。

大国主神が名前を尋ねたけれども答えないし、随行する神々に尋ねても誰も答えない。すると、蟾蜍(ひきがえる)が現れて、「案山子(かかし)の久延毘古(くえびこ:\*註)が知っているでしょう」と言う。案山子を呼び寄せて、改めて尋ねてみると、こう答えた。

「これは神産巢日神(かみむすびのかみ)の御子、●少名毘古那神(すくなびこなのかみ)です。」

\*註:御大の岬(のちの世で言う美保)

現在の島根半島の先端にある美保と言われている。 <https://yahoo.jp/aVRkpQ>

\*註:●久延毘古(くえびこ)

足があっても歩くことはできないが、天下のことは何でも知っている、偉い神様。

案山子を神格化したもので、「山田之曾富騰(やまだのそほど)」とも言った。

真偽を確かめるために高天原に連れて行き、母である神産巢日神に問いかけた。答えはこうだった。

「確かに私の子どもです。指の股からこぼれ落ちた子です。葦原色許男神・少名毘古那神、兄弟として二人で力を合わせてこの國を作り上げなさい」

二人は協力して國造りを始めたのだが、事が成就する前に少名毘古那神は、海の彼方の常世國(とこよのくに)へと渡ってしまった。

相棒を失った大国主神は、嘆き悲しんだ。すると海の彼方から輝きながらやってくる神があった。

「私を祭り上げてくれるならば、力を貸してやってもいい。そうでなければこの國は治められないだろう」と言う。そして、「大和國の青垣のように取り囲む山々の、東の頂に身を清めて私を祭るが良い」

御諸の山(みもろのやま:現在の三輪山 \*註)の上にいる神である。

\*註:御諸の山とは・・・神が鎮座する山すなわち、御室山のこと。

奈良県桜井市の三輪山(大神神社:おおみわじんじゃ)を指す

### <4> 須佐之男神の子孫たち

大国主神は、須佐之男神の娘である須勢理比売を妻としたが、この他にも何人かの后がいて、多くの御子(神々)を生ませた。

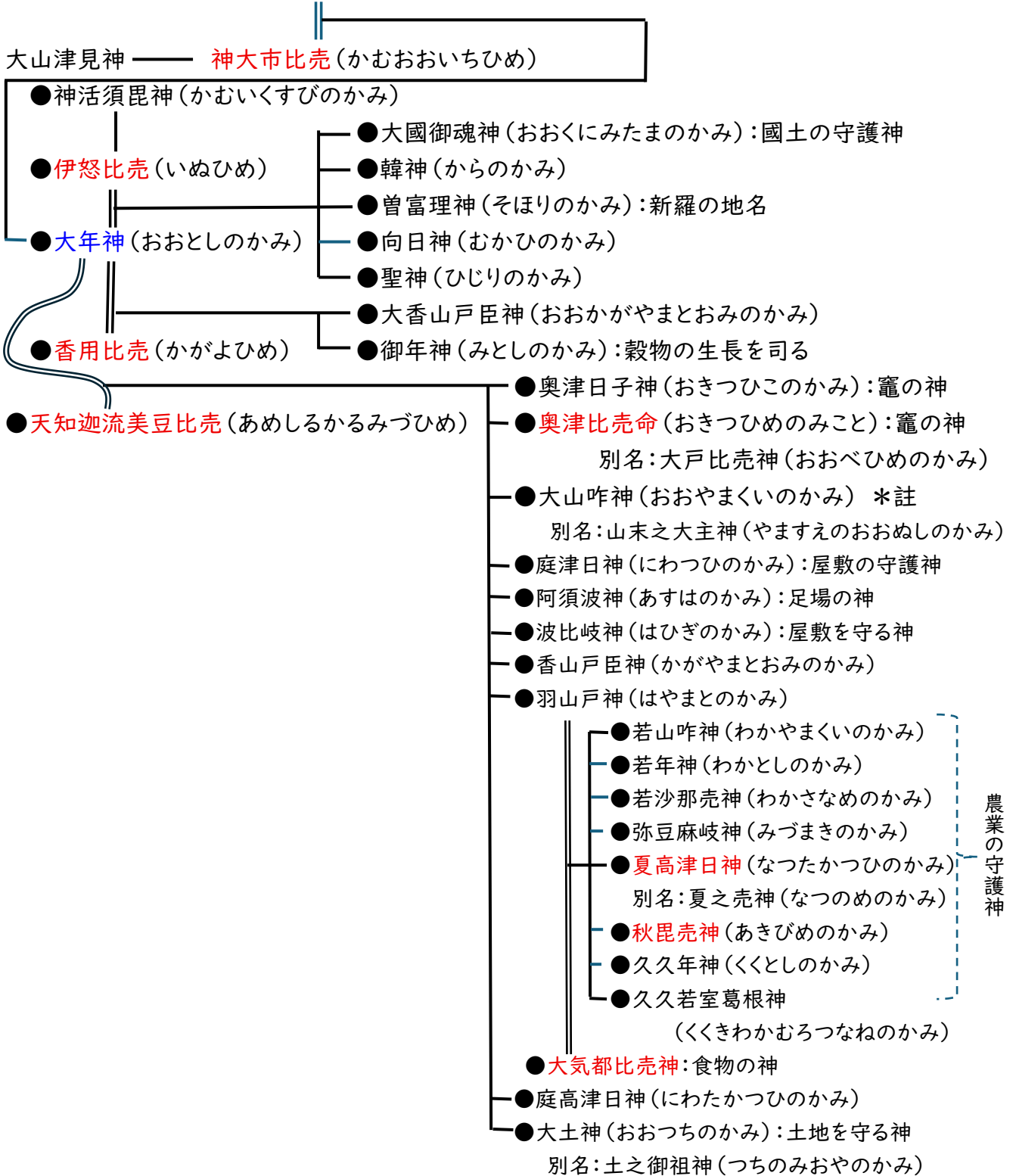
大国主神の御子である大年神(おおとしのかみ)も同様に、何人かの後に数多くの御子を生ませた。次ページに、「須佐之男神の子 大年神(おおとしのかみ)の系図」としてまとめてみた。

大国主神は出雲國に在って國を治め、徐々に勢いを増していたのだが、高天原では天照大神が別なことを考えていた。

以上

須佐之男神の子 大年神(おおとしのかみ)の系図

須佐之男神(すさのおのかみ)



\*註: 大山咋神(おおやまくいのかみ)

別名: 山末之大主神(やますえのおおぬしのかみ)。

近淡海國(ちかつおうみのくに: のちの近江)の日枝山(ひえのやま: のちの比叡山)にあり、葛野(かずの)の松尾(まつのお: 嵐山の松尾神社 \*註)にもいる、鎬矢を持つ神。

\*註: 松尾神社

嵐山の松尾大社(まつのおたいしゃ)。渡月橋の南の松尾橋(桂川)の西岸にある。